

とうきょう すくわくプログラム実践報告書

所在	世田谷区南烏山2-30-17-1階
園名	世田谷区立芦花保育園

1. 活動のテーマ

<テーマ>

子どもも大人もワクワクする魅力ある園庭づくり

<テーマの設定理由>

子どもが「どうしてだろう？」と疑問を持てる場、「そうだったのか！」と発見を楽しめる場、「しらべてみよう」と探究心が生まれる場になってほしいと思い、園庭の一部を今年度から緑地化し、ビオトープを設置した。草が生えてくることで虫が集まってきたことで「なんていうむしなんだっけ？」「なにを食べるのかな？」と興味を持つようになってきた。また、ビオトープにメダカがいることで生き物が身近になり、興味を持つきっかけになったり、大切に思う気持ちが出てきている。生き物や草花が身近になったことで成長の過程を見ることができたり「なにを食べているのだろうか？」などの疑問が生まれ、調べることや実際に見ることで気づきや発見につながっている。自然との関わりを通して主体的な学びや探求心を育む環境づくりが必要なため本テーマを設定した。

2. 活動スケジュール

5月 すくわく PT+事務所 話し合い

6月 【はらっぱに虫をよぼう！】

元々あったはらっぱの場所を PT で土づくり、雑草植え

*年長中心にはらっぱの雑草に水やりをする。

杉の子保育園 ビオトープ見学。PT で見学の報告会、今後の進め方についての話し合い→お便りで保護者周知

購入品の検討、購入

10月 【園庭で家づくり！】【もっと虫や蝶がくる園庭にしよう！】

マルチパーツ納品 子どもたちに遊び方を伝え幼児クラス中心に始める

なごみ池を設置し、『ろかトープ』設置→お便りで保護者周知

花壇に花を植え、子ども達が水やりをする。

3月 お便りで活動を保護者周知



3. 活動のために準備した素材や道具、環境の設定

気になったことをすぐに調べることができたり気づきや発見につながるように、事務所の一角に図鑑(持っていけるような小さな図鑑も含む)や虫の絵本、小さな虫かご、電子顕微鏡を設置した。生き物を自然の中で観察ができるように、ビオトープや花壇、草地の環境を作り、整えていった。

4. 探究活動の実践

<活動の内容>

- ①さなぎにならないな…～なんでアオムシがいなくなるのか、どうすればさなぎになるのか考えてみよう～
- ②さなぎのからはどうなってるの?～電子顕微鏡でみてみよう～

<活動中の子供の姿・声、子供同士や保育者との関わり>

①レモンの木には卵からアオムシになり、もう少しでさなぎになろうとしているアオムシがいたが、アオムシはレモンの木からいなくなった。「どこにいったのかな?」という保育士の声掛けに「カラスにたべられたんじゃない?」「えんていにハトもいたよね」と考える子どもたち。5歳児の男児Aが「さなぎになるためにどこかにいったんだよ」というと「でも、きがあるじゃん」「なんで?」と新たな疑問が生まれ、アオムシの図鑑や虫の図鑑で調べる姿があった。

図鑑には記載がなかったものの、Aの保護者がレモンの木でアオムシを育てたことがあるということで、お迎え時に聞いてみることになり、「高い場所とかさなぎになりやすい場所を探しに行くため、木ではさなぎになることがあまりない」とのことであった。

「じゃあどうすればさなぎになってちょうちょになるまでを観察できるかな」と保育士が問いかける。アオムシを飼育ケースで観察し、ちょうちょになるまでを観察した経験があったため「おおきいケースがあればレモンのきを(そのまま)いれられるのにな…」という声が出てきた。アオムシがまたレモンの木についたタイミングでレモンの木の鉢をそのまま入れることができる昆虫ゲージに入れて観察することにした。遊びの中で観察していると、ゲージの中でさなぎになることができた。



②さなぎがちょうどに羽化するまで観察することができた。すると「さなぎのからってあんなところにあながあいてるんだ」と一人の子が言うと「からってどうなっているんだろう?」「なんかぎざぎざしてるきがする」という疑問が生まれて、電子顕微鏡で調べることになり、各々で顕微鏡を覗き込み「なんかすけてるね」「けっかんみたいなのあるね」と気づきにつながっていた。



5. 振り返り

<振り返りによって得た先生の気づき>

虫が来る環境を整えていったことで、子どもたちがどうしたら虫が来るのか、何が好きなのかということも考えるきっかけとなっていた。虫には興味ないけど顕微鏡は使ってみようという子が顕微鏡を使う中で、虫に触ってみようとする姿や虫が来る花を調べているうちに花の種類を覚える姿があり、図鑑や顕微鏡、虫メガネ付き虫かごなど環境を整えることで、一人一人の興味や関心が広がっていたように感じる。職員も一緒に環境を作り上げていくことで、職員自身も興味を持ち、子どもたちとより身近に気持ちを共有することができた。

また保護者の方に聞いて共有していったことで、保護者の方も興味を持ち、家庭も巻き込んで興味の輪が広がっていったように感じた。共有の仕方を定期的にお便りを発行することや電子顕微鏡や図鑑のある事務所のアピールをの仕方を工夫することでこの輪がもっと広がっていくので、来年行っていく。

虫を見つけると「ずかんをしらべてみよう」「けんびきょうでみてみよう」という声が聞かれるようになった。調べる中で「こんなもようがあるんだ」「あしにギザギザがついている」などの気づきにつながっていた。アゲハチョウの卵から成虫になる流れを見ることができたことで子ども同士が成長の共有をしたり、気づきを共有して図鑑で調べたりするなど探究心が芽生えていたので、図鑑の充実や虫メガネになる飼育ケースなどを充実させ、より深まっていく環境作りを来年につなげていく。